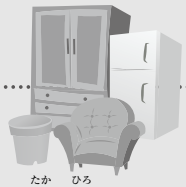
ストックごみの現状とその要因

第1部 ストックごみにしないために



京都市ごみ減量推進会議　職員　堀（ほり）　孝弘（たかひろ）

❶ プロローグ

◆執筆にあたって

この稿は、筆者（堀）が所属する京都市ごみ減量推進会議（以下、ごみ減）の活動と、筆者自身の経験を例に、ストックごみを作らない、ためないための参考情報を紹介します。個人の立場で取り組めることだけでなく、地域住民に情報発信する行政や市民団体からみて参考になる情報も紹介します。

◆ごみ減で「ストックごみ」が意識されたきっかけ

ごみ減でストックごみが話題になったのは、2015年6月の総会での出席会員の発言がきっかけでした。「亡くなった家族がためていた家財道具等があるが、どのように処分、活用したらよいか」というもので、他の出席会員からも同様のことで困っている旨の声が出ました。後述するフリーマーケットの活用などが紹介されましたが、何の対策もなければ年々蓄積し、将来何かのきっかけで大量に放出される潜在的なごみ（ストックごみ）への対応が、ごみ減でも意識されることになりました。

◆ストックごみの実態把握

ストックごみについて、この後の説明をわかりやすくするため、使用者からみたモノの位置づけについて「必要・不要」「使える・使えない」の2つの軸で表をつくり、4つの領域について、どのような対応が必要か考えてみることにします。

表1　使用者からみたモノの位置づけ

	必要	不要
使える	「使える・必要」 使い続ける	「使える・不要」 もらい手をさがす
使えない	「使えない・必要」 修理・リメイクして使う	「使えない・不要」 適正に処分する

表1の左上の枠、「使える・必要」を除く3つの領域にあてはまるモノは、いずれも現在使っていないモノです。右下の「使えない・不要」にあてはまるモノは、すでにストックごみであり、適正な処分が必要です。右上の「使える・不要」は、もらい手さがしが可能ですし、左下の「使えない・必要」は、修理やリメイクにより「使える・必要」にすることができます。

しかし、実際にはモノの位置づけはこれほど単純ではありません。ストックごみの実態を把握するため、翌7月に開催された「地域ごみ減量推進会議全体会議」で実施したワークショップにおいて、参加者にストックごみの実態について尋ねました。参加者に小グループに分かれてもらい、「家の中でいつの間にかたまるモノ・使わないけれど、たまるモノ」および「ためない方法・たまっても、ごみにしない方法」を話し合ってもらいました。

地域ごみ減量推進会議とは、主に小学校区単位で地域住民によって設立されているもので、当時京都市の全学区に近い199学区で設立されていました。当日は57学区から80名の参加があり、概して高齢の方が多くを占めました。議論では、「たまるモノ」として家財道具や電化製品の他、衣料品、紙資料や書籍をあげる意見が多く出ました。贈答品や趣味に関わる収集物、また配偶者が集め残しているモノなどは、廃棄の合意が取りにくいこと、さらには年を重ねるほど自力での対応が難しくなり、いざ手放さざるをえなくなったとき、どのように排出すべきか把握していない人が多いことなどがわかりました。

◆この後の報告

出された意見から、モノが蓄積される要因の中に、「思い出」や「いつか使えるかもしれないという期待」があり、それは日常排出されるごみとは大きく違うこと、さらに処分やもらい手さがしの情報アクセスを容易にすることが重要であることなどが明らかになりました。

上記の意見を表1に反映させると、「必要」と「不要」の間に、使ってはいないが「思い出」や「期待」があり、簡単に不要と位置づけることができない中間領域が存在し、そこに属するモノの扱いがストックごみ対策の中で、難しい問題として浮かびました。

仮にこの中間領域を「迷いのゾーン」と名づけ、これを加えた表2を作りました。表2には5つの領域があります。このうち「(5)使えない・不要」への対応は、遺品整理を含めて本誌他稿で扱われるため、本稿では扱わず、それ以外の領域で考えられるストックごみ対策について、述べることにします。

❷「迷いのゾーン」ともらい手さがし

◆判断がつけにくい「(3)迷いのゾーン」への向き合い方

まず、「(3)迷いのゾーン」から取り上げます。どのようなモノに「思い出」や「いつか使えるかもしれないという期待」を感じるかは、人によって違いますが、例としてあげるなら、写真や旅行の土産、子どもたちが幼かった頃の道具、大切な人からの贈り物、印象深かった本や音楽CD、関心事の資料等があると思います。このような「思い」がこもったモノにどのように向き合うか、近年注目を集めた「整理収納」の考えが参考になります。

ごみ減では、2015年度、整理収納コンサルタントの資格をもつ森下真紀氏（NPO法人 暮らしデザイン研究所理事長）の協力を得て、「整理収納」に2R

表2　迷いゾーンを追加したモノの位置づけ

(1) 使える・必要
(2) 使えない・必要
(3) 迷いのゾーン
(4) 使える・不要

	必要 ←→ 不要		
使える	(1) 「使える・必要」	(3) 迷いのゾーン	(4) 「使える・不要」
使えない	(2) 「使えない・必要」		(5) 「使えない・不要」 pp.60～参照

図１　整理収納モニター宅から出た不要品

（リデュース、リユース）の発想を採り入れた「できるだけ捨てない整理収納ワークショップ」を3回開催しました[1]。また、モニターを募集し、「できるだけ捨てない整理収納事例づくり（以下「事例づくり」）などに取り組みました。

前者は、2Rの発想を採り入れた整理収納の普及に取り組んだ実験的な催しで、対象は一般市民です。ここで森下氏から「整理は捨てることではなく、モノに対する意識を高め，こだわったモノの選択と必要なモノの量の吟味など、満足度の高い生活に切り替えること」との提起がありました。先にあげた「迷いのゾーン」のモノに対する考え方として、使う頻度やお気に入りの程度などで、残すモノと処分するモノを分ける考え方や、思い出深くどうしても捨てられないモノは、「メモリーの箱」を設けそこに保管すること、また、デジタル化以前の写真や印象深い書籍の一節などは、スキャナーで電子化して保存する方法等が紹介されました。

◆リユースショップへの持込経験

「(4)使えるけど、不要なモノ」は、「もらい手さがし」をすることができます。先にあげた整理収納の「事例づくり」では、モニターを募り、整理収納コンサルタントを派遣してモニター宅で整理収納作業をして、発生した不要品のもらい手さがしに取り組みました。その経験を情報として今後に活かそうというものです。詳細はごみ減のURL[2]で報告しています。ここでは、もらい手さがしで得た経験や情報の一部を紹介します。

このとき発生した不要品は図１のとおりです。これらのうち、段ボール・古紙は、古紙リサイクルに出し、他は、モニターの知り合いへの譲渡、リユースショップ（ごみ減ではリサイクルショップをこのように表現しています）への売却、「ゆずります・もらいます」ネット掲示版（以下、フリマアプリ）に出品するなどをし、どうしても引き取り手のないものは、京都市の処分場に持ち込み、廃棄しました。

フリマアプリを活用して、個人情報の保護など社会情勢に対応した工夫がさまざま盛り込まれていることを感じました。詳細は、本誌他稿（pp. 50～）がテーマとして扱いますので、そちらに譲り、この項では、リユースショップへの衣料持込時の経験を報告します。

図2の情報は、どの時期にどの季節もの衣料を持ち込むとよいかなど参考になります。意外だったのは、男性用の作業着が女性向け衣料品よりかなり高く売れたことです。「こんなの売れるわけない」と思い込まず、地域のリユースショップを活用してください。

◆フリーマーケットへの出店

ごみ減では、市民向けのフリーマーケットを、2016年度までは京都市役所前広場で、2017年度からは左京区岡崎公園で、ほぼ毎月開催しています。先に紹介した「地域ごみ減量推進会議」が出店する場合は、出店費用を免除するなど、より多くの市民が出店・出品できるよう支援しています。

また、京都市内に限らず、さまざまな団体がフリーマーケット等を開催していますが、そのような情報に地域住民がアクセスしやすくするため、ごみ

図２　リユースショップで、古着を売るときのポイント

減では、京都市内で開催されているフリーマーケットや利用可能な「ゆずります・もらいますコーナー」の情報などを集めたサイトも開設しています[3]。このサイトは、「まとめサイト」を利用することで、費用ゼロで開設できました。

❸ 修理・リメイクの大切さ

◆「(2) 使えない・必要」なモノは、修理・リメイクを

愛着があるモノなど、不具合が生じても修理やリメイクをして長く使い続けたいものです。ただ実際には、修理するより買い替えたほうが安く済む場合もあり、また修理技術をもった店の減少など、修理が身近でなくなりつつあります。ごみ減では、京都市内の家具、衣料品、かばん、くつ、楽器など、修理をしてくれる店の情報を集めた「京のお直し屋さん情報サイト・もっぺん」[4]を開設し、修理を身近に感じてもらうように取り組んでいます。2014年度からは、リユースショップの情報も掲載対象とし、修理屋さん約180店、リユースショップ約30店を掲載しています。

また、インターネットを使っていない人のため、もっぺん掲載店の情報を冊子化したり、前述のフリーマーケット会場に、「もっぺん出張所」と名づけた修理体験ブースを設け、掲載店に出店してもらうなど、修理店情報の普及に努めています。

◆修理で得たプライスレスの経験

筆者個人の経験ですが、2年前、あるもっぺん掲載店に、高校生のときに使っていたエレキギターを修理してもらいました。音が出なくなって40年近く、何度も買い替えを考えましたが、何か月もアルバイトをして買ったことや一時は趣味以上に取り組んでいたこともあり、捨てることもできず、ずっと「オブジェ」として置いていました。

店主が相談に乗ってくれて必要最小限の修理にとどめ、買い替えた場合の7〜8分の1の費用で修理してもらいました。約40年ぶりにアンプを通じて音が出たときの感激はプライスレスでした。

❹ 少ないもので豊かに暮らす

◆ストックごみ対策でも3Rの発想を

「(1) 使える・必要」にあてはまるモノは、ストックごみではありませんが、いつかは「不要」になります。必要量以上にモノがあふれた暮らしをしていれば、いずれ大量の「不要品」を生み出すことになります。

本稿が最も強調したいのは、ストックごみ対策を考える場合も、3Rの考えを意識してほしいことです。適正処分ももらい手さがしも大切ですが、長く使い続けることは、それ以上に大切です。そのためモノの購入・入手時の判断がとても大切です。

◆モノの量ではなく質に満足を

購入・入手時の考え方として、グリーン購入[5]やエシカル消費[6]などがありますが、グリーン購入はまず初めに「必要性の考慮」をあげ、衝動買いや価格だけでの判断を避けるよう求めています。さらには「所有」の前に、リースやレンタルの検討も求めています。

グリーン購入やエシカル消費は、モノの購入時に、対象とするモノの生産から廃棄まで、各段階で環境や人権に配慮した商品やサービスの選択を求めています。少しくだいて考えると、作り手や作られ方への共感、使い勝手、入手の際のエピソード、これらが使い手のモノに対する愛着を生み出します。モノを長く使い続けるため、耐久性や修理の仕組みが用意されているかなどの他、愛着をもてるか否かは大切なポイントです。

モノの量ではなく質に満足を感じ、大切に使っていく暮らし方への転換が、ストックごみの発生抑制にも、持続可能な社会づくりにも必要なことと思います。

◆少ないもので得られる満足

「少ないモノを長く使い続ける」ことと、ケチな暮らしは別物です。筆者の経験を例にあげ、この稿を終えたいと思います。

図3はアメリカの大手アウトドア用品メーカー製のフリースジャケットです。買ったのは2001年。購入時の価格は、当時発売されたファストファッションブランドのフリースより8倍高く、ずい分迷いましたが、質感、色、デザインとも気に入り、購入しようと店員に渡したところ、「長く使っていると表面が毛羽立つことがありますが、持ってきていただいたら修繕します」といってくれ、支払い後も、修理の体制や対応を説明してくれました。

図3　2001年から使用しているフリースジャケット

「この服には守ってくれる人がいる」という安心感と、16年経っても褪せない品質の高さに満足感を抱きながら、今に至るまで現役で使い続けています。

（廃棄物資源循環学会誌第28巻第3号 pp.219-225（2017）に関連記事掲載）

参考文献

1）京都市ごみ減量推進会議：開催報告「できるだけ捨てない整理収納ワークショップ整理編」(2015)
http://kyoto-gomigen.jp/stories/14.html（閲覧日：2017年10月24日）
2）京都市ごみ減量推進会議:モニターさんと一緒に実施した「できるだけ捨てない整理収納」の取組報告（2015）
http://kyoto-gomigen.jp/works/152.html（閲覧日：2017年10月24日）
3）京都市ごみ減量推進会議：捨てずに片付く、もらい手見つける。京都の情報（2015）
https://matome.naver.jp/odai/214425630616626400 1
4）京都市ごみ減量推進会議：京のお直し屋さん情報サイト・もっぺん（2008）
http://www.moppen-kyoto.com/（閲覧日：2017年10月24日）
5）グリーン購入ネットワーク：グリーン購入基本原則（2001）
http://www.gpn.jp/about/rule.html（閲覧日：2017年10月24日）
6）（一社）エシカル協会：エシカル消費とは
http://ethicaljapan.org/ethical-consumption（閲覧日：2017年10月24日）